
封印の氷刀と契約の魔剣

天神烈火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

封印の氷刀と契約の魔剣

【Nコード】

N5083P

【作者名】

天神烈火

【あらすじ】

現代に今だ存在し続けている、刀鍛冶師の物語、代々受け継がれてきた刀の製作技法によって生み出された、たった一つの刀、それは、作者者によって、姿を変え、その者の心を写し出した。

彼の刀は、峰が白く、刃が蒼かった、氷のように輝き、その中に、義の心が見えた。

ある日、彼は下山中に足を滑らし、穴に落ちる。

気がつけば、真っ白な空間の中!?

いったい何がおこったのか・・・

人として冷たい心を持った、天神氷義、それを物語るような、愛刀・氷牙

彼は、氷牙を手にし、異世界へ行くことに！？

魔法や精霊が織り成す世界で唯一の精霊学校を拠点に氷義は自分の義を貫くことができるのか！？

プロローグ（前書き）

どーもです。

天神氷義と言います。

この小説は、極端に短いと言うことをまずおつたえいたします。

「なんかこの話どこかで知ってる気がする」と思う方もいらっしゃると思うのですが、そこは、ご了承ください。

それでは、・・・・・・・・・・・・・・・・・・どうぞ!!

プロローグ

この世界には、加護という物が存在する。
誰もが加護の力を持つがその力は、小さく、微弱な物である。
だが、その加護を物に宿し、力を高めるとされる。

とある町のとある道場での事だ。

『せい！』

『せい！』

数人の小学生ぐらいの子供の声が一斉に道場に響きわたる。

子供たちはやや短め木刀を手にし、一生懸命に木刀を振るう……
そして、その子供たちの前に立ち指導しているのが――――

「よし、今日はここまで」

高校生ぐらいの青年が稽古の終了を告げた……

『ありがとうございます』

子供達が声をそろえて、お辞儀をしながらそういった。

「今日も疲れたねー。」

「そうかなー」

「けど、いい汗かいたねー」

「それもそうだねー」

そう言いながら、そろそろと、帰っていく。

まだ、若いながらも立派な心がけである、どうやらこの道場には随

分と素直な子供が集まっているようだ。

先ほどその子供たちの前に立ち指導を行っていた青年は天神氷義あまがみひょうぎと言う名前を持つ、まだ16と言う若さでこの天神道場の頭首を務めている

彼は柔道着をきていたが、小学生の指導を終えたあと、すぐに、私服に着替えてた。

「毎日毎日、ご苦労じゃのお、氷義」

そう言いながら、奥の方から、お爺さんが出てきた。

「あっ、お爺さん、仕事は終わったの？」

「おお、今日は注文が少なかったからのお」

俺のお爺さんは包丁職人だ、ご先祖様は、刀鍛冶師だったらしく、お爺さんも、刀を作った事があり、俺も自分で愛用の刀を作ったり、短刀を作ったりした。

話によると、先祖代々、自分専用の刀を作ってきたらしく、その刀に自分の加護を宿したとされているらしい。

らしい、というのも、伝わった話だし、刀の製作技法も今では、あやふやだからである。

「氷義よ、今日も裏山に行くのか？」

「そのつもりだけど」

「早めに帰ってくるのじゃぞ、なにやら薄気味悪い天気じゃからの」

「薄気味悪いって、夕方だけど天気はいいんだけど・・・まあい

いや、行って来る」

そう言うと、一本の刀が入った袋を背負い、山へと出かけていった。

40分程、山を登ったところで、刀の鍛錬をしていた。

「はあー！」

「せいや！」

「ていや！」

氷義は愛刀の氷牙を構え、素振りをしていた。

ブン！ブン！蒼い刃に白い峰の刀、風を斬る音がすると共に速い太刀筋で、刀を振るっていた。

「よし！」

氷義は、気持ちを落ち着かせ、刀を構える。

・・・・・・・・次の瞬間、氷牙から、冷気がでてきた。

その時、風が吹き、周りの木の枝、ガサリと揺れ、数枚の葉が落ちてきた。

「！」

目にも止まらぬ速さで刀を振るい、木の葉を切り刻む、まるで風に吹かれたように葉はまた宙を舞う

「天神一刀流、無氷の義の陣、吹雪」

彼はそう呟き、刀を一振りし、カチツつと音を立て鞘に収めたと、宙に舞った葉はバラバラになり、一瞬に凍りついた

彼は毎日、ここへ来て、少しだけ鍛錬を行っている。

ゴロゴロゴロ、いきなり雲行きが怪しくなっていた。
お爺さんが薄気味悪い天気と言っていたのはこのことなのだろうか、さっきまであんなに晴れていたのに、いきなり雨雲が空を覆う

「雨が降りそうだな、久しぶりに、あの道を通って帰りますかな」
あの道とは、道場までは1番の近道だが、急な斜面で、なにより、疑惑つきの道なのだ、噂では、人が消えたとか、だが、そんなことは気にせず通るのがおちだった。

「よっと、相変わらず、急だな」

そこは、斜面が急なうえに、えたいの知れない奇妙な穴が開いている。

「雲行きが怪しいし、日も落ちかけてるし、急ぐとしますか」

そう、言ったとたん、ポツポツと雨が降ってきた

「最悪だ、急がないと」

そういったとたん、雨はザーと降り出し、氷義は足を滑らした。

「のわ！」

滑り落ちた所が災難なことに、あのえたいの知れない穴に転がり下りた……

「一体何が起こったんだ?」
氷義が目を覚ましたのは、そこは、一面真っ白な空間だった

プロローグ（後書き）

どうでしたか？

わかりにくい方もいたかもしれないので、説明します。

かんたんな話は主人公が異世界に飛ばされるっただけです。
文が短い事はご理解してくださいね。

がんばりますので、よろしくお願いします。

第一話　って!ここどこだよ!てか、オレ死んだの? (前書き)

どうも!

今回は、主人公のキャラ設定とってくれるとうれい입니다。

それでは、どうぞ!

第一話　　って！ここどこだよ！てか、オレ死んだの？

ここってどこだろう

なんか、一面真っ白なんだけど、たしか、雨が降ってきて、急いで下山しようとして、足を滑らして、穴の中に落ちて・・・・・・・・・・気がついたらここに居たってわけか。

「気がついたようだな」

っえ？誰？どこどこ？

氷義は体を起こし、周りを回りを見渡した。

「なんだ、空耳か・・・ハア・・・」

氷義は、辺りを見渡しても誰もいないので、なんとなくため息をついた。

「後ろだ、後ろ！」

そういわれ、振り返ってみると・・・

「・・・・・・・・・・」

そこには、ショートヘアーで、髪を後ろで一つに括っている真紅の髪に黒いローブを着た・・・・・・・・・・青年？いや、20代の男性？

「なんだ、その無言で俺を見る目は、まさか、こんなのが神様だとは思ってもよらなかったか」

「中二病？」

・・・なんだろう、このゲームでありそうな設定・・・これは中二病の神様の妄想の世界ではないのでしょうか

「それは、なんとも興味が湧く世界というより、随分とメルヘンですね」

「そこは、了承してくれ」

「そこでだ、その世界の環境に耐えられるように君に力を授けよう、君をこんな所に飛ばしたのは、俺の責任だし」

「それはありがたいのですが、その力ってなんですか？」

「それはだな、その世界には、聖霊や魔物、妖精などを従えるために契約を結ばなければならなくてな、その契約する力だ」

「神様ー、一つ質問があります」

「なんだ？」

「契約に制限ってありますか？」

「有るぞ！契約するかどうかは、する相手次第だし、あまり多くは契約できん、それに契約したとしても、暴走して、コントロールが効かなくなったり、契約したとしても、力がうまく使えなかったりするから、無理はあまりしないほうが身のためだな、だが、契約したのがいくら弱くても、鍛えれば育つぞ、人も同じだ、それが自然の原理だからな」

「なるほど」

「君には契約する力とこれをやろう」

神様が俺にある物を手渡した

「何ですかこれは」

俺の手には、蒼く輝く親指程度の大きさの水晶があった

「それを君が持っている氷牙に押し込んでみろ」

そう言われ、刀の手柄のところに押し込んだ……

押し込んでから5秒ほど経ったころだ氷牙が光りだした

「これは……」

氷義は氷牙を鞘から抜くと蒼く輝いていた

「驚いたか、さっき押し込んだのは君の居た世界にある加護の力を強めるものだ、君にはすまないことしたからな、ちなみに、聖霊や魔物、妖精などには生き物の姿をしたものや武器の姿をしたものが存在するからな」

「ありがとうございます」

「あと、契約の言葉は……「知ってます」なに！」

「汝、我命により契りを結び我を君主と認めん事を命ず……でしよ」

「そうだが、何で知っている」

「なんとなくですよ」

「そうか、っあ、これを渡さなければならぬな」

「これは、手紙？」

「それを持って、セントリナ学園というところに行け、そこが君の過ごす学園だ……あと、あちら世界に行くとき多分、封印の森という場所に居ると思う、だから、そこから北へ進んでくれ、そうすると学園が見えてくる」

「一つ聞いておきますが、学園長の名前は何か？」

「グラム・ブレイズだ」

「異名ですね、それは」

「そうなるな、それじゃあ、君をその世界へ飛ばすぞ」

「お願いします」

「では・・・行って来い！」

「のわ！」

いきなり、足場がなくなった・・・ってまた落ちるのか！

「またか~~~~~」

第一話　って!ここどこだよ!てか、オレ死んだの? (後書き)

これで、世界観がなんとなく分かってもらえたかな
＜読者へのお願＞

誤字が有る場合、コメント、などをお願いします。

第二話 我が義、今ここに示さん（前書き）

この話を書いてたら

つい、その世界に入った気がします

短いですけどの・・・どうぞ！

第二話 我が義、今ここに示さん

「・・・・・・・・っは・・・・・・・・・・はぁ・・・」

なんだろう、この、目を覚ましたら森の中っていういかにもありがちなこの場面、ゲームでよくあるパターンだよねー。

「確か、北に向かえって言ってたな」

俺は体を起こし、そして立ち上がった

（なにが――多分、封印の森の中に居ると思う――だよ、マジじゃねえか、まったくもつとましな所に飛ばせよ）
心の中でおもいきりグチった

（つか、今何時だ？・・・・・・・・時計がない・・・・・・・・なら空を見上げよう）

氷義は、空を見上げた・・・・・・・・空は少し暗いが明るくなりかけていた

（日の出ってことは、朝か・・・・・・・・）

そんなことを考えながら、北へ向かっていると・・・・・・・・洞窟が目に残った・・・

「・・・・・・・・・・はぁ・・・」

（なんか、この場面、あるよねー、ゲームとかでよくあるよねー）
俺は、心の底から、あきらめるぐらいの状況に遭遇した

（この洞窟から、いきなり強敵出現なんておちか、初心者のチュートリアル的な感じか、どっちかだよな！）

だが、そんな事を考えて悩むよりも体が先に動いた

（ここは、本能のままに！）

（この先、何かあるのかなー、何かあるといいなー、いやあって欲しい、何も無いときのショックすごく嫌だし）
入って2分ほどで、そんな事を考え出した

「っあ（そういえば、神様から授かった加護を強める力って、いたい）」

そう氷義は神様とのやり取りを思い出し、氷牙を鞘から抜いた・・・
（物は試し、力を発動すれば、全てが分かるさ）

——我が刀に眠りし我が加護よ、我が命により、眠りから解き放たれん——

氷義は、いつもは適当に唱えている呪文を今回は、真剣に唱えた・・・
・・・すると！

シュウウウウウ、氷牙から白い煙が上がった

ブン！氷義は、氷牙を一振りした・・・

すると！・・・刀の刃の部分が、サファイヤの如く、蒼く輝き、峰の部分が、

白銀のような白さで光輝いていき、凍りついていた

「これは・・・」

俺は刀を構え、近くにあった岩を思いっきり斜めに切り込んだ
スウウウウツ、荒い音を一切立てず、紙を斬るかのように、静かに
岩を切断した

「・・・！」

ミシミシと切断した岩の断面が凍っており、そこから、徐々に岩が
凍っていった

（神様も良いものくれたものだな）

「・・・ッ！」

すると氷牙は、元の色を取り戻し、静かに、鞘の中に納まった

「はは、ははは・・・」

今、一瞬だけ、退屈だった元の世界が懐かしく感じた・・・
帰りたいとは、思わない、だが、氷牙を作り上げたあの感動がこみ
上げてきた・・・

はじめて加護の力を使ったあの頃を・・・

（いつから、いつからだろうな、俺の心が凍りついたのは・・・）

氷義は、少しの間そこに立ち尽くした・・・

あれから、どれだけの時間がたったのだろう・・・

「っは！・・・（やばっ・・・トラウマが・・・俺って、そのセ
ントリナ学園って所でうまくやっていけるのか・・・）はあ」

氷義は、心のどこかに、不安があったらしく、思いっきりへこんだ・
・

氷義は、なんとか、ネガティブな気分からやっと抜け出し、さつき切断した岩の断面を見た

そこには、鏡を見ているかのように、自分が映し出された……
「……………」

そこには、銀色の髪に、右前髪に薄い青のメッシュが入った中の上辺りの顔立ちをした自分が映し出されていた

(……………なんでメッシュが入ってんの?)

以前の氷義は、メッシュなどは一切入れておらず、なぜか今はメッシュが入っている状況

(……………そういえば！加護のあり方で本人の姿も変わるって聞いたことがあるような……………それなら、辻褄が合う……………
……………そろそろ先に進むか)

氷義は、洞窟の奥へと進みだした

(あれ、中は意外と明るいもんだな……………って、中は鍾乳洞とあるんだ……………ってか、なんか明るいなーって思ってたら、虫の光か、これだけ綺麗だと、心が和むなー)

そこには、とても幻想的で虫の光によって、ぼんやりと映し出される鍾乳洞があった

ちなみに鍾乳洞は、海底でサンゴなどが堆積することによってで

きた石灰岩が地殻変動によって地上に隆起し、雨水や地下水によって浸食を受けてきたものです。石灰岩は一般の岩石とは異なり、主成分である炭酸カルシウムは二酸化炭素が含まれ地表の水にはよく溶けるので、通常の岩石より激しく浸食され、その内部に多くの空洞を生じるようになります。結果として、表面には溶けた石灰岩の残りが突出し、内部には空洞を生じ、鍾乳洞が作られます

氷義はそんな風景を楽しみながら、奥へ奥へと進むと……

（……剣？……あれは剣だよな）

いかにも、抜ける物なら抜いてみる……と言わんばかりに、大振りの剣……いや、魔剣のような禍々しい気を発する大剣が立派な祠に刺さっていた

（聖霊、魔物、妖精のどれかだよな……予想からすると魔物だと思う……ここまで来たんだ……抜くしかないな）

氷義は、覚悟を決め、その大剣の前に立とうとしただが、ある言葉が頭を過ぎった

……『契約するかどうかは、する相手次第だし、それに契約したとしても、暴走して、コントロールが効かなくなったり、契約したとしても、力がうまく使えなかったりするから、無理はあまりしないほうが身のためだな』……

そう、頭の中で神様との会話が、頭を過ぎった

（リスクがデカイな……それに危険すぎる……失敗すれば、最悪のケースは……死）

氷義は少し悩んだ……下手をすれば死という命の選択を

「我が義、今ここに示さん」

氷義はそう叫んだ・・・内心、少し恥ずかしかった・・・だが、今はそんな事は関係ない・・・自分の器が今、この場で試される・・・そう思うと、怖かった・・・だが

大剣に手をかざし・・・

——我は、汝の力を欲する者なり——

——我、我が器にて汝の鞘とならん事を契約す——

さぜだろう、知りもしない、契約の言葉が頭の中に流れ込んでくる・・・

——汝、我命により契りを結び我を君主と認めん事を命ず——

氷義は、契約の呪文を言い終わった・・・その時！

いきなり、地面から、炎が噴出し、大剣が炎に包みこまれた

「ッ！」

氷義は、とっさに手を引っ込め、大きく後ろへ下がり・・・

——我が刀に眠りし我が加護よ、我が命により、眠りから解き放たれん——

瞬時に氷牙を抜き、呪文を唱え、戦闘体勢に移った

そして、大剣の方は・・・ブォォォン！火柱の中から大きく、

大剣が一振りされ、その姿を現した

・・・

大剣は、古代文字のようなものが赤く炎で浮き上がり、大剣を右手で軽々と握る者は、重く、とてつもなく硬そうな真紅の鎧を身にまとった炎帝とも言うべき者が現れた

「まさしく炎帝と言うべきだな」

刹那——いきなり炎帝が大剣を一振りし、そこから炎が巻き起こり氷義へと襲い掛かった

「せーいや——」

竜巻となった炎を氷義は、氷牙を振るい、炎の竜巻を・・・意図も簡単に切り、竜巻を消した

刹那――――氷義は竜巻を消した直後、動揺した炎帝の右腕に切り込んだ

キィィィィィ！その音は少しだけ鈍いものの、炎帝の右腕を切断したガシャ――――ン！炎帝の右腕を切断したことにより、炎帝の右手から、大剣が落ち、炎帝の目の前に突き刺さった

「勝負あったな」

俺は炎帝と大剣のまえに立ってそう言った

炎帝は何も言わず、跪いた

「俺を試したのか？」

そう言うと、炎帝はうなずいた

「これはつまり、俺が認められたと言う事か」

炎帝は静かにうなずいた

「それなら」

――――再び汝に命ず――――

――――我は、汝の力を欲する者なり――――

――――我、我が器にて汝の鞘とならん事を契約す――――

――――汝、我命により契りを結び我を君主と認めん事を命ず――――

――――そういと、俺と炎帝は光に包まれた

「・・・・・・・・・・はっ」

目を覚ますと祠にいた・・・

「夢？・・・いや、あれは現実だったか」

氷義が右手の甲の刻印にきずいた

そこには、紅く、一本の剣の形が刻まれていた・・・

第二話 我が義、今ここに示さん（後書き）

どうでしたか？

誤字がある場合コメントで報告お願いします

第三話 炎劍テオダーナ（前書き）

今回でやっと、学園に到達します
それでは、どうぞ!!!!!!!!!!!!!!

第三話 炎剣テオダーナ

氷義は今、洞窟を出ようと思い、洞窟の中、一人で歩いていた

(なんか・・・一人って、虚しいな)

まさしく心の叫びであった

<残念だが、一人ではないぞ、ご主人>

「なに！・・・誰だ！」

氷義は、突然の声に驚き、辺りを見渡した・・・だが、周りにはだれも居なかった

(気のせいか・・・っていうか、声にも出してないのに・・・
・疲れてるのかな)

氷義は、そう心の中で呟き、再び歩き出そうとした瞬間！

<気のせいではない！ちゃんと居るわ>

何処からともなく、声が聞こえてきた

(・・・いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや、無い無い無い無い無い無い無い無い無い無い)

<そんな、現実逃避みたいな反応はやめてくれ、ご主人>

(・・・聞こえてるの)

どうやら本当のようだ・・・予測すると心を読まれている

<聞こえているぞ、その右手の刻印を通してだがな・・・それで、やっと認めたか、ご主人>

刻印？・・・そういえば、炎帝と契約した時についたあの刻印のことか・・・とするとこの会話相手は

(・・・炎帝？)

<今さらか！と言うより、なんで疑問系なんだ？>

(ただ、確信がつかないだけだ)

内心、炎帝とか言ったのは、パツと見て、思いついた名前で、本当の名前なんて知らないからだ

<炎帝と言われるのも悪くは無いが、俺は、炎剣テオダーナといわ

れている＞

（へえ、随分と大層な名前だな）

＜えっ！この名前を聞いてそのリアクション！？＞

（・・・なんか、ごめん！）

＜ご主人は、本当に何も知らないのか？＞

（・・・なにも知りません）

＜つまり、なにも知らないでこの洞窟に？＞

（そうなるな）

＜・・・ご主人に説明しておきます・・・実際、俺は、魔剣の中でもトップクラスの魔剣でして、そのあまりの強さにより、この地に数百年前に封印されまして、ここ数年だけでも、数十人もの者が我が力を手に入れんと契約をしてきたのです・・・ですが、その契約の呪文が唱え終わる前に我が力に耐えれず消えた者や、我が炎によって焼かれた者がいたのです・・・つまり、ご主人は、その苦難を難なく乗り越え、俺と契約したのです＞

（・・・なるほど）

＜ですから、その反応はやめて下さい、・・・それに、ご主人には、一切、聖霊も魔物も妖精も全ての者の気配が無く、気配を消せる者を連れていたとしても、あの炎によって、消されていました＞

（つまり、なにが言いたい）

＜ご主人は、あの剣のみで、俺に勝ったと言う事です＞

（なるほど、だが、俺の持っている、この刀をそんじよそこの剣と一緒にするなよ）

＜どういう事です？＞

（それはだな・・・ってか、お前、出てきたらどうだ？出てこれるだろ）

＜・・・いいのですか？＞

（構わん）

＜それなら、お言葉に甘えて＞

そう、聞こえた瞬間、右手の刻印がカッと光り、その瞬間、目の前

に火柱が立った

「この姿ではアルバといいます、以後お見知りおきを」

その火柱の中から、目、髪と共に燃え滾る炎のような赤の色をした青年が現れた

「俺は天神 氷義、よろしくな」

そう言い、握手を求め、手を前に出した

「こちらこそよろしくお願いします」

氷義とアルバは、互いに握手を交わした・・・

「それで、ご主人のその腰に提げているその剣は一体どういう物なのですか？」

アルバがそう聞いてきた

「これは刀って言う物でな、ってか、そのご主人ってのはなんとかならんか？」

少し前から、ご主人と言われていた事に、違和感を感じており、アルバに改善を求めた

「旦那でどうでしょう」

「やめてくれ」

「では、大将で」

「悪化してるぞ」

呼び方が、なんか・・・昭和っぽい

「それでは・・・氷義殿でどうでしょうか」

「まあそれでもいいか」

なんか・・・侍とかが言いそうな言い方だな・・・ま、いっか
「それで、刀というのは？」

あつ！この世界では・・・刀って、あるのか！？・・・こんな時は・・・

「刀ってのは、異国の剣の一種だ」
「なるほど」

「刀は、刃の部分が剣には両方にあるが、刀には片方しかないのが大きな違いだな」

そう言いながら、氷義は、氷牙を抜き、アルバに見せた

「確かにそうですね」

よかった・・・ってか、そろそろ洞窟から出ようよ

「アルバ、この薄暗い所にずっといるのもなんだし、そろそろ出ようぜ」

「それもそうですな」

そういい、氷義とアルバは刀の話をしながら洞窟の出口へ向かった

「ん、ん~~~~~、気持ち~~~~」

氷義達は、洞窟を抜け、氷義は大きく背伸びをした

「氷義殿、俺は少し疲れたから、戻ります」

「わかった」

そういうと、アルバは赤い粒子となって消えた・・・

「さてとっ・・・って、あれ？」

氷義は洞窟に入る前に見た太陽と今見ている太陽の位置があまり変わっていないかった

（あつれえ、3時間程度経つてると思ってたのに、太陽の位置的に1時間程度しか経ってないのか）

氷義の思っていたよりも、あまり時間が経っていないかった

「とりあえず・・・セントリナ学園に向かうとするか」

そう言い、氷義は北へ北へと歩いていった

「ここか」

氷義は、セントリナ学園の校門にたどり着いた

「きれいな学園だなぁ・・・ってか、30分ぐらいで着くんだ」

氷義は、あの洞窟を抜けてから、30分程度でセントリナ学園に着

いたのだ

「随分と時間がかかったな」

え？どこかで聞いた事のある声がした

「……………」

振り返るとショートヘアーで、髪を後ろで一つに括っている真紅の髪に黒いローブを着た……………」

「なんだ、その無言で俺を見る目は、まさか、こんなのがグラム・ブレイズだとは思ってもよらなかったか」

「中二病？」

「違うわ！……………ってか、そのボケ、2回もする！？」

……………「どうか、神ですね、この人……………ってか、なんでいるの！？」

「何で居るんですか！」

「それは……………暇だったからだ」

「そんな理由で！？」

「まあまあ、立ち話もなんだ、学長室に來い」

「スルーですか！？……………わかりました」

場所は移り変わって、学長室

「どうだ、この世界に來て」

「俺自身の好奇心によって、一瞬、死にそうになりました」

「だが、その好奇心は素晴らしい物をもたらしたようだな」

神……………いや、グラム・ブレイズは、氷義の右手を見てそう言った

「あゝ、これはそのゝ」

「隠す必要ない、気配を消しているつもりか知らないが私にとってはバレバレだ」

＜氷義殿、いいのですか？＞

（構わん、出て來い）

今、氷義とアルバとの会話が交わされた・・・その瞬間

「まさか、バレるなんて思いませんでした」

氷義の後ろから、アルバが現れた

「安心しろ、悪い人ではない・・・たぶん！」

「いい人だと確信してくれ！」

「氷義殿、この人、信用できるんですか？」

「まあ、大丈夫だろ・・・多分！」

「自身たっぷりに多分！って言わないで！」

「あゝ、はゝ」

「・・・・・・そんは余談はさておき、君にこれからこのセントリナ学園に編入してもらう訳だが、とりあえず、君はカラスト教室に編入してもらうでしょう」

「はい・・・・・・ところで、アルバはどうしたら」

「それに関しては問題ない、君のパートナーとして扱われるから、同時に編入としておこう」

「了解しました」

「ってか、あの炎剣テオダーナがよく契約をしたものだな」

「俺は氷義殿の義に感服しただけだ」

「ほお、そういえば氷義君」

「なんですか？」

「君は確か、刀鍛冶師だったな」

「そうですか」

「なら、ちょうどよかった」

「なにがですか？」

「実はだな、ここにも数年前まで鍛冶師が居てな、その工場が残っているんだよ、しかもそこ、生活とかもできるように設備がそろっているから、そこを宿舎にしてくれて構わない」

「分かりました」

「そうか・・・おっと、そろそろ時間か」

「なにがですか？」

「もうすぐ、ホームルームの時間だ」

第三話 炎剣テオダーナ（後書き）

どうでしたか？

感想、誤字等のコメントよろしくお願いします

第四話 転校生の感覚と皆の感覚はなんかずれてる（前書き）

新年明けましておめでとうございます
今年初の最新話を・・・どうぞ！

第四話 転校生の感覚と皆の感覚はなんかずれてる

俺は今、カラスト教室前の廊下にいる
あの学園長・・・・いや、グラム・ブレイズの会話の後・・・・

「回想」

「そうか・・・おっと、そろそろ時間か」
「なにがですか？」

「もうすぐ、ホームルームの時間だ」

「エ?・・・あっ」

本音の事を言うのと、話にのめり込みすぎて、ここが学園ということ
を忘れていた

「いま、ここが学園ということを忘れてたよね!？」

「うっ・・・・・・・・・・」

読まれた、いや、当てられた

「まあとりあえず・・・・・・・・これを着てくれ、これはここの制服
だ」

手渡された制服を見て見ると・・・・

白いブレザーとズボンに黒のワイシャツ、それから赤のネクタイ・
・・・これの形はスーツみたいだし・・・・・・・・まるで・・・・・・・・ホス
トの着そうなスーツだな

白いブレザーには、赤い裾と袖のラインと金のボタンが着いている・

・・・他はごく普通のスーツと変わらない

「ほおり、これが制服か・・・氷義殿」

アルバが制服を見て、氷義に話しかけた

「なんだ？」

「俺はどうしたら」

「テオダーナよ、君は衣服などは再構築できるろうが」

「・・・・・・・・・・っあ」

そう言うのと、アルバは、早速、制服を再構築した

「と、言うわけで、そこで着替えれくれ」

学園長・・・・・・・・いや、グラム・ブレイズが指差したのは・・・・・・・・洋服店とかでよく見る・・・・試着室？

「学園長！一つ質問していいですか？」

「なんだ？」

「なんで、あんな所に試着室があるんですか？」

「あれはだな・・・・・・・・秘密だ」

「え・・・・・・・・まあ、いいですけど」

そういい、氷義は試着室っぽい所に行き、着替えはじめた

「着替え中」

ガラガラガラ、氷義が試着室っぽい所から出てきた・・・

「おお、似合うではないか」

「似合ってますよ」

「どうも」

俺はあまりスーツなどは着たことがないのだが、かなり似合っているらしい

「校舎と寮の案内は授業の後にするとして、カラスト教室の行く道はの紙に書いておいたから、そのとおりにいけば着くよ」

「分かりました」

「担任の教師には知らせてあるから、問題は無いぞ、それから今日の授業は午前で終わるから、終わったらここへ来い、それじゃあ、頑張れよ」

「はい・・・・アルバ、行くぞ」

「承知！」

俺とアルバは渡された紙を頼りにカラスト教室に向かった・・・

回想終了

そんな訳で、今、教室に入るタイミングを伺っている・・・いや、黒いスーツを着た男性の教師に「ここで待つように」と、この教室前に着た時に言われ、待っているところだ

（まだかなー）

アルバと一緒に待っていると・・・

「君達！入って来い」

『はい』

アルバと声をそろえ返事をし、教室に入った

「まずは自己紹介をしてくれ」

「はい・・・俺の名前は天神 氷義です、よろしくお願いします・・・そして、となりにいるのが契約相手の・・・」

「アルバと言います、以後、お見知りおきを」

そうアルバが言い終わった瞬間・・・教室がざわついた
ざわついたと言うより、雑談が始まった・・・

（転入生が来た時って、大体、こんな感じだよな・・・ってか、机の並び、おかしくね！？そして、男女比！なんで男子2で女子16なんだよ！）

それのそのはずだ、今ざっと数えても18人しかいないのに、縦が6、横が5の並び、計30も並んでいるからである・・・そして、男女比もおかしかった

そんなことを疑問に抱いた氷義であった・・・
そんな事とおいとおいて、教室の雑談の中身はというと・・・

「ねえ、どっちがタイプ？」「私はあの赤毛の子がいい」「私は銀髪の方かな」とか言っていた

（大半が女子ってのは居づらいな・・・ってか、この学園の男女比

はどうなっただ？」

「あのー、銀髪の人に一つ聞いてもいいですか？」

突然、一人の女の子は立ち、質問を要求してきた

「無理の無い範囲ならいいですけど」

「出身地は何処ですか？」

「異国なので、言っても分からないかと」

いきなり危ない質問だな！

「好きな食べ物？」

ごく普通の質問だなー

「特にはないですが」

「特技はありますか？」

「料理です」

家で唯一俺だけが家事とかできたもんーと、思っていたとき教室では少し驚いた人もいたようだ

「では、その腰に掛けてらっしゃる剣はなんですか？」

制服を着ていても氷牙を肌身離さず付けていた氷義に、金髪のツインテールの髪型の少女から、鋭い質問がきた

「こ、これはー」「静かにしろー、ってか、五月蠅いから黙れ」

氷牙の事について質問され、少し動揺していた俺は担任の先生に助けられるかのように、先生の声がかかった

「ってことで、好きな席に座れ」

「はい」

「承知」

（そんな訳で、俺は一番後ろの窓際に向かう！あそこなら、日当たりもいいし、他人から遠いしな！ところでアルバは？）

くもろん、氷義殿の隣の席ですよ・・・あと、この状況でも通じますから>

どうやら、アルバが出てきている状態でも通じるようだ

なんやかんやで、目指していた席に行く途中、女子からの視線が尋常じゃないくらいに刺さった

<転入そうそうモテてますね>

(それじゃあ、この目線はなんだ)

<前言撤回します>

目線を気にしながら、席に到達した

(これで一安心だな)

<そうですね>

「授業後のことだ!」

時間も過ぎ、午前の授業が終わった・・・

「よっ!」

「どうもです」

二人・・・いや、この教室唯一の(氷義とアルバを除く)男子二名が話しかけてきた

「はじめまして・・・え」と

名前が・・・分らない

「俺は、春夏秋冬 ひとしせ 勇人 はやと よろしくな」

青のショートヘアーに黒い目をした青年が先に自己紹介をしてきた

「僕は、シュキ・イヴェールといいます」

もう片方は、緑のショートヘアーにメガネで・・・あほげが付いていた

「これはご丁寧に」

「あゝ、敬語はよしてくれ、同じルームメイトだし」

「そうですよ」

随分とやさしいな

「わかった」

「承知した」

「その、しゃべり方は堅苦しすぎるだろ」

「そんなことはないですぞ」

「アルバ、それは少しずつ直していこう」

「承知」

確かにそのしゃべり方は堅苦しいな

「で、その氷義が持つてる剣はなんだ？」

「あゝ、これは「それは、私も聞きたいわ」え？」

すこし離れた席から、ある少女がこちらへ向かってきた・・・ってか、今日は午前中なんだから、用が無いんだったら早く帰れよとツッコミたくなるタイミングで半分以上帰っていた中での登場であった

「その剣についてとそのアルバって言う契約相手について話して」そう、エメラルドグリーン色の目をした、アメジストのように美しい色をしているショートヘアーの髪型だが、右側を横結びしており、その括っている髪が胸辺りまで伸びている少女が話しかけてきた

「お前は礼儀ってものを知らんのか！せめて、名前だけでも名乗れよ」

勇人が少女に文句を言った

「そうですねよ、はしたない」

あれは、さっきの金髪の髪のスインテールの子だ

「私の名前はリディア・コルベルといいます」

「これはご丁寧に」

リディアがあいさつしたと、一気に目線が一人に集中した

「わかったわよ、私はクリム・ミステイク」

「よろしく」

これで、一件落着・・・

「氷義殿」

「なに？」

「学園長殿との約束がありますから、そろそろ行かないと」

「まじか？」

「マジです」

すっかり忘れてた・・・

「ごめん！今から学長室にようがあることを思い出したから、アルバの事とかはまた今度でいいか？」

「用があるならしかたないな」

「じゃあ、この話はまたこんどで」

「しかたないですわね」

「今日は、見逃してあげるわ」

皆、信じやすいな

「それじゃあ、また明日」

俺とアルバはその場をはなれ、学長室へ向かった

「学長室」

「失礼します」

「失礼」

「来たか、ってか、少し遅かったな」

「すみません」

氷義はあることに気が付いた

「初めまして、私はセントリナ学園聖霊騎士団所属のセシル・ラズベリィだ」

青の髪をしたポニーテールの同年代くらいの女性が挨拶してきた

「これはご丁寧に、俺は天神 氷義だ、そして隣に居るのが、アルバと言う俺の契約相手だ」

「以後お見知りおきを」

「こちらこそ」

そう、学長室にはグラム・ブレイズと俺とアルバのほかにもう一人居たのだ

「挨拶は済んだかな？」

『はい』

三人そろって返事をした

「それでは、セシル君、君には氷義君とアルバ君を学園の案内をしてもらいたい」

「了解しました」

まるで、堅物だな

「氷義君は案内してもらった後、もう一度ここに来てくれ、それじゃあ、あとはよろしく」

「わかりました」

「それでは行きましょうか」

その後、1時間ほど、学園内を案内してもいい、その後学長室へ向かった・・・・・・・・・・

第四話 転校生の感覚と皆の感覚はなんかずれてる（後書き）

どうでしたか？

サブタイトルはただの**あるある**です

第五話 恐れられる者（前書き）

更新遅れてすみません

第五話 恐れられる者

俺は今、学長室に向かう途中である

というのも、セシルさんに学園内を案内してもらった、そのあと学長室に戻って来いと学園長……いや、グラム・ブレイズ言われている……ってか、もう学園長でいい気もする

ちなみにアルバは、これから宿舎となる、こう鍛冶場付きの……・小屋というより、アパートに近い大きさの家に行ってもらったつまり、今は俺一人である……説明をかねて、回想の一部（寮の説明）をどうぞ

「回想」

「あれが女子寮で、手前の寮から順番に、バラモン、クシヤリア、ヴァイモン、シュガラ、スイニモラ、カラストと、なっている」

その寮は、とても大きな寮で、まるで高級ホテルのようだった

「でかいなく、で、男子寮は？」

「あそこに見えるのが男子寮だが、君はその隣のレンガの家だが、今は誰も居ないから、おそらく、荒れたい放題だろうな」

男子寮は女子寮の約2倍ほどの大きさで、俺の寝泊りする家は、女子寮の半分ほどの大きさだったが、俺にとっては大きすぎたちなみに、この学園は、男女比が女子9…男子1となっている

「それは掃除をすれば済む話だ」

「氷義殿」

「なんだ？」

アルバがいきなり話しかけてきた

「あの家の掃除をやらしてもらってもよろしいですか？」

「それは構わんが、できるのか？」

「物の整理ぐらいならできます」

「それくらいならいいが、何も捨てるなよ、案外使えたりもするか

ら」

案外というのも、今までに散々と色々な物を大活用してきた俺の勿体無い精神の結論である

「ところで氷義君、一つ聞いてもいいか？」

「なんでしよう」

「あのアルバというのは、一体なにものだ？」

「それは・・・その・・・」

（言えない、魔剣だなんていえば、アルバが・・・）

氷義は、言うのをためらった・・・だが

「俺は、炎剣テオダーナ・・・魔剣だ！」

氷義が話す前にアルバが自分の正体を名乗った

「魔剣！？」

セシルが驚きを隠せずに声を上げた

「魔剣と言えば、手にした物が死ぬまで破壊の限りを尽くしたと言われている・・・貴様！」

セシルは剣を抜き、氷義の首に剣を突きつけた

「それは、ちゃんと制御できなかった場合の人の事だろ」

「それもそうだが、騎士として、忠告しておく、今すぐにも契約を断ち切ることだな」

「忠告は済んだのならその剣を退けてくれ」

「学園の説明はここまでだ」

そう言い、セシルは剣を納めた

「分かった、アルバは先に行っている、俺は学長室に戻る」

「勝手にしろ」

氷義はその場を後にした

「天神氷義、なにかやらかしてみろ、私がこの手で消してやる」
セシルは、氷義が居なくなたあと、そう呟いた

「回想終了」

そんな訳で今は、一人というわけだ

なんやかんやで、回想の説明をしている間に学長室に到着した

「失礼します」

「おお！戻ってきたか来たか、で、学園はどうだった？」

「とてもいい所ですね」

氷義は清々しい笑顔で答えた

「それは何よりだ」

「ですが・・・」

あまり、気にはしていないけど、聞いとくべきだよな

「なんだ？不満でもあるのか？」

「それが、セシルさんに警戒されました」

「アルバの事でも話をしたのか？」

当てられた！・・・いや、分かってたのか

「正確にはアルバが言ったのだがな」

「そりゃあ、警戒もされるだろう」

「なんでですか？」

「魔剣そのものがこの世界から拒まれてるからだな」

そるほど、漫画とかでもよくある話だ・・・だが、そこまで危険とは感じないが、アルバの話では、相当多くの人を消したらしい

「で、俺にここへ戻ってくるように、というのはなぜだ？」

「それだな・・・」

「・・・」

「・・・」

「溜めないでもらえませんかねえ！」

氷義は、長い間に怒りをかんじ、ツツコミを入れた

「すまんすまん、ついな」

ついじゃねえー！

「御託はいいですから」

氷義は怒りを抑えながらも話を進めようとした

「はいはい、実はな、たいした事ではないのだが」

「前置きはもういいですから」

「簡単な話、君に包丁を作ってほしいのだよ」

（最近、あんまり包丁とか作らなかつたんだよな）

氷義も一人の職人と見られているようだ

ちなみに、この学園は女子全員の生徒は聖霊、妖精と契約できるがそれに対し、男子生徒の7割が、契約の力を持たず、魔法の類や、特定の技能を持ち、この学園に入っているらしい、余りの3割の男子は、契約の力を持つ者で、魔物、妖精と契約が結べるのである。

※男性は魔物、妖精と、女性は聖霊、妖精と契約できるが、氷義とグラム・ブレイズはその制限を無視できるのである

「そんな物、学園長なんだから、買えばいいじゃないですか」

「そうなのだが、買うもの買うものと全部切れなくてな」

「なるほどー」

（俺も、そんな事とかあったから自分で作った覚えがあるなく、親に頼む前に）

「金は出すから、作ってくれ」

「商売としてなら引き受けましょう」

「材料は君の家の倉庫に置いてあるから自由に使ってくれて構わない」

「ちなみに、報酬はどのくらいですか？」

「日本円でいう25万でどうだ」

「十分なのですが・・・この世界の通貨って？」

「それはー小説の設定上・・・関係が無いから気にしないで」

「とてつもないぐらいにリアルな話を持ち出さないで」

「その話題はやめてください」

「誰だ！」

「氷義君、その声は作者さんの声だから」

「そんな説明はいいから、話を戻して」

『はい』

（こんなところで作者って）

氷義は今、いけない事に手をつっ込んだ

「おほん、では頼んだよ」

咳払いをして、話を仕切り直すかのようにいった

「はい」

「おっと、これを渡さないと作業ができんだろ」

「これは・・・作業服！ありがとうございます」

こんな時は大体ツツコミを入れる部分がある物を渡してくるのに、今回はまともだった

「それでは—————」

ガチャ、いきなりドアが開いたので、氷義は言いかけの台詞が止まった

「失礼します」

入ってきたのはセシル・ラズベリイが入ってきた

「君は魔剣の———」なにをしにきた」

学園長は少し怒った声で聞いた

「それは、この学園に魔剣とその契約した者を置いておくのは危険だと思い、学園長にご相談に来ました」

（俺のことか）

「なんだ、そんな事か」

「そんな事とは、聞きずてなりません」

セシルは学園長がスルーしようとした話題にくらいついてきた

「なにか文句でもあるのか？」

「大有りです、大体、学園長は何事にもいい加減すぎます」

「いい加減ではない、忙しいだけだ」

「では学園に魔剣とその契約した者を置いておくのは危険だと思いますか」

（うわゝ、学園長が押されてる）

「思わんな、少なくとも彼の場合は、魔剣が従っているから、安心できるのだが」

「学園長は魔剣とその主を信用できるのですか!？」

「信用していればこそ、彼は今、ここにいます」

（なんか・・・感動する）

「うっ・・・」

今の言葉でセシルは反論する余地がなくなった

「分かったなら早く出て行け」

「はい」

そういうとセシルはしぶしぶと学長室を後にした

「すまないな、無駄な時間をとらせてしまった」

「いえ、迷惑はしてませんよ」

「そういえば、昼食はとったか？」

「そういえば、もう昼時ですね」

「いまから昼食にするから、一緒にどうだ」

「では、お言葉に甘えて」

そんなわけで、お昼をごちそうになることにした・・・

「この学園は、レストランもあるが、自分で料理することもできるシステムでな」

「それは便利ですね」

「だろ、それに食材は自由に共用の場から取っていい事となっている、なんせ寮では自炊だしな」

「なるほど」

「そんな訳で、今回は、俺が腕を振るってご馳走しよう」

「ありがとうございます」

そんな会話をしながら、食材を求め、共用の場に向かった

やってきたのは、全生徒が利用する、共用の場、通称、大兵糧庫
「えーっと、ベーコンとキノコと・・・パスタ、オリーブオイルに
塩コショウだな」

「ベーコンとキノコのパスタといったところですね」
材料からして予想ができた

「ご名答、じゃあ、調理場に行くぞ」
「はい」

やってきましたのは調理場・・・といっても、個室のキッチンである
学園長もよく自炊しているらしく、調理の手つきが慣れていた

「どうだ」

「とっても、おいしいです」

「それはよかった」

昼食を取った後、大兵糧庫にいき、そこで大体3日分ほどの材料を
手に入れ、宿舎に戻った

(アルバはちゃんとやってるかな)

そんなことを思いながら、宿舎に向かっているところ……

「ねえ」

「……」

クリム・ミスティークがいきなり、現れたのだが……ため息がでそうになったが、ここは抑えた

「ねえってば」

「……」

いま、この子に関わってはいけない気が思いつきりした

「ねえ、聞いている？って、どこ行くのよ！」

氷義はその場から、逃走した

「これは見なかったことにしよう」

これはいわゆる、現実逃避と言うものだ

「ちょっと、まだなにも聞いてないでしょ」

「アルバのことだろ」

「うっ……」

追いかけて来たものの、聞きたい用件を当てるとその場に立ち尽くした

「はぁ……やっとなついた」

今、学園が広すぎると実感した

ガチャ、ドアを開け、家の中に入ると……

「案外きれいだ……」

「氷義殿、今帰ったところで？」

「ああ」

「部屋のほこりはきれいにしておきました」

「それじゃあ、鍛冶場は？」

「それは、元々きれいだったようで」

「それじゃあ、一仕事するとしますかな」

「俺にも何か手伝うことはありますか？」

「火の調整を頼む！」

「承知！」

そんなわけで、作業服に着替え、材料を用意し、今は鍛冶場にいるちなみに、簡単な説明をすると

1、鉄の上に鋼の小片をのせ、炉の中で800～900度に熱する
2、炉から取り出し、ハンマーで鋼を叩き込みます。これが包丁の生地となる

3、表面に付いた酸化鉄^{ベト}を取り除き、大きな金槌で丈を延ばし、幅を広げて、鋼をよく鍛えてから整形をする

4、800度前後に熱した包丁を素早く水に入れ、瞬間に焼き入れます。ここから刃付けに至るまで、数十の行程があります

5、砥石で研ぎおろして、刃付けをします。刃付けも数十工程を経で行われます。

6、柄付けをして、銘を入れて完成させます。

これが大体の包丁の製作手順です

そんな説明をしている間に、氷義はすでに、2番の工程に入っています

それから、約3時間後

「ふう、できた」

「やっとでしたね」

「ああ」

個人としては上出来だと思う

「氷義殿」

「なんだ？」

「とりあえず、休憩しましょうよ」

「そうだな、ちょっと疲れたしな、少し、外の空気を吸ってくるわ」
「承知」

氷義は、鍛冶場を後にして、外に出た

「すう、気持ち」

「なにがよ」

「って、なんで？」

なんでだろう、クリームがいる・・・

「ずっと、探してたのよ」

「なんで？」

「言っただしょ」

「あー、それじゃあ」

早足で、家に戻ろうとした

「まちなさいよ」

「却下」

「拒否よ」

なんと自分勝手な！

「じゃあないから・・・また明日な」

「なんでそうなるのよ」

「明日にまとめて言えば事は済むし、2度手間にならないから」

明日、まとめて皆に言えば済むのになんでそんなに早く知りたがるのかな」

「いい加減に言わないと怒るわよ」

「はいはい、また明日ね」

こいつ、めんどくせー

「言えって、言ってるでしょ！」

「のわ！」

いきなり、三叉槍で刺されかけた、ってか、そんな物どこから出してきた！

「この武器は、私と契約した妖精よ」

「へえ」

「こうなったら、力づくでも聞き出すまでよ、それに百聞は一見に如かずって言うし、無理やり力を使わせるのもありかもね！」

クリムは三叉槍をグルグルと回転させ、そして叩き付けてきた

「危なっ」

間一髪で避けたものの、武器がないので反撃もできず、ただ単によけることしかできなかった

（体術で敵うのか？）

氷義はうまく槍を避けながら、攻撃するタイミングを窺っていた・

・だが

「うわ！」

そのとき、氷の矢が飛んできた

「抜け駆けはいけませんわよ」

少し離れたところから、声がした・・・あれは・・・リディア・コルベルさん？・・・あんたがやったのか！

「この状況は厳しいな」

「なによりディア、結局彼方も力づくじゃない」

「う、うるさいわね」

いまのうちに改善策を考えなければ・・・っあ

（アルバ、氷牙をもって外にきてくれ）

＜何かあったんですか？＞

（暴力女達が襲ってくる）

＜それって、まさか＞

（お前、今なんか変なこと考えなかったか？）

＜い、いえ、な、なにも＞

（とにかく、氷牙を持ってきて）

＜承知＞

「なにぼくとしてるのよ」

「え？って、のわ！」

危なかった、あやうく串刺しになるところだった

「逃がしませんわよ」

氷の矢が飛んできた・・・なんかあの弓派手だな
タタタタタタタタタタタ・・・↑爆走中

（アルバ、早くしてくれ）

<今行きます>

氷義は弓と槍の攻撃をなんとか避けながら逃げていた

「まともに戦いなさいよ」

「逃げてるだけでは体力を消耗するだけですわよ」

逃げるしか方法がないからこうしてるだけだよ

「氷義殿」

向こうの方からアルバが氷牙を持って走ってきた

「アルバ、氷牙をこっちに投げてお前は姿を変えろ！」

「承知！」

アルバは氷牙をこちらへ投げ、そして・・・

ボオオオオオ・・・アルバの居たから包み込むように火柱が立った

「背中がから空きですわよ」

リディアはそう言い、氷の矢を放った

「がら空きじゃあねーよ」

氷義は投げたれた氷牙をキャッチし、そのまま氷の矢をなぎはらった

「間一髪ってとこかな」

氷義は氷牙を鞘から抜き、呪文を唱えた

「アルバ、炎帝の姿見せれやれ」

【承知】

そう、炎剣テオダーナから聞こえ、そして

ボオオオオオ！また火柱が立ち、そこから炎帝が現れ、炎剣テオダーナを抜いた

「これでやっと戦える・・・開幕だ」

第五話 恐れられる者（後書き）

作者.. いやー、おもしろくなってきたな

氷義.. のんきに言ってる場合か！

アルバ.. そうですぞ

作者.. いいじゃんか、お前らそのものがチートみたいなものなんだから

氷義・アルバ.. どこにそんな要素がある

作者.. 後々分かるよ

氷義.. なんかするきだな

作者.. さーねー、つう訳で、次回もお楽しみに

設定 ゲームは説明書が無くてもできるけど、後々見ることになるから説明書は

それは設定の話です

設定 ゲームは説明書が無くてもできるけど、後々見ることになるから説明書は

作者のナレーション…一旦これまでの物語を解説しましょう（本音は自分の説明不足や物語の世界観を説明するためです）

【設定】

・聖霊・妖精・魔物の類をまとめて精霊と呼ぶ
・セントリナ学園の男女比は男子1…女子9である
・セントリナ学園の女子生徒は全員が妖精を操れるが男子生徒はごく一部しか精霊を操る事ができず他の生徒は対精霊用の道具を開発したりする生徒が集まっている

主人公の説明

名前…天神 あまがみ 氷義 ひようぎ

身長…172センチ

体重…53キロ

目は色は黒く、髪は銀色で前髪の右側に薄い青のメッシュが入っているのが特徴で、ルックスはかなり良い方である。

性格は冷静で面倒な事は一番嫌いであるが、仲間の事や自分の大切な物が傷つけられたり危険に侵された場合は我を忘れ自分の身も案じず守ろうとする…ひようが…だが、時たま取り乱す事がある

愛刀の説明…名は氷牙ひようがと言い、峰の部分は白銀の如く白く、刃はサファイアの如く輝き、その切れ味は相当な物で、加護の力を発動すると切れ味がさらに上昇する他、冷気や氷を纏ったりし、斬り付けた物を瞬時に凍らす力がある

名前…アルバ／炎剣テオダーナ

身長…175センチ

目・髪と共に燃え滾る炎の如く赤い

性格は忠誠心が強い

炎剣テオダーナの説明…古代文字のような物が刻まれており、炎

を纏っているのが特徴で、炎や剣の類に干渉が出来る

前は氷義は・・・凶暴女子二人に襲われました♪

だがしかし、武器を持ってなかった氷義は戦うこともできず、アルバに愛刀の氷牙を持って助けるように救援を求める・・・だが、その間氷義は全力で逃げ回っていた

そして、ついに武器を手にした氷義、これで戦えるようになった・・・

この後大変なことがあるとも知らずに・・・

氷義「おい」

作者「うわっ！驚かすなよ」

氷義「気にするな」

アルバ「氷義殿、なんでここに来たんですたっけ」

氷義「作者に呼ばれた」

作者「そのとおり、つう訳で、この台本読んでくれる」

氷義「あ、ああ」

氷義・アルバ「はいどーもー」

氷義「えーっと、この二人で漫才させていただく訳ですけども・・・
って、おい」

作者「なんだよ」

氷義「なんだよ・・・じゃねーよ、なにやらしてんだよ」

作者「そのわりにしては乗り気だったじゃねーか」

氷義「うつ・・・」

アルバ（氷義殿が押されている）

氷義「アルバ、帰るぞ」

アルバ「しよ、承知」

作者「まったく、素直になればいいのに・・・さて、それじゃあ皆さん、御機嫌よー」

第六話 大切な初戦がとんでもない事に!?!そして、裏で動く謎の組織(前書き)

更新遅れてすみません・・・

最近は色々忙しくてなかなか更新できませんでした

今はテスト前なのでまた更新が遅れそうなのですけどがんばります

※この作品の作者はただの学生(中学生…現在2年)です

第六話 大切な初戦がとんでもない事に!?!そして、裏で動く謎の組織

〔天神氷義〕

ここは・・・男子寮の裏にある、ちょっとした茂みの中・・・
今の現状を説明すると・・・女九名に取り囲まれている・・・
なんともこの状況が説明し難いです・・・正直、俺、天神氷義にも
何があつたのかも分かりません。

確か、俺とアルバはりディア・コルベルとクリム・ミステイクの
二人と戦った・・・いや、まだ戦っていない・・・いや、戦いだ
そうとしたんだ、その瞬間・・・いきなり、何所かともなく・・・
風? あ、いや、別に風が吹いた訳ではない、風のような感じの・・・
銃弾? いや、ビーム?・・・なんとも表現に困るような物・・・あ、
ブーメランの様な物が飛んできた・・・様な感じがした・・・その
瞬間だ、いきなりの事だ、女の生徒に囲まれた

「おい、魔剣使い、お前をここで消す!」

一人の女子生徒が俺に向けて言ってきた

「は?」

「惚けるな!、お前が魔剣と契約している事はセントリナ聖霊騎士
団のセシルから聞いた、そして、今、その女子生徒二人を襲おう
としている」

「何の勘違いだよ」「そうよ」「そうですわよ」「全くですな」

「惚けるな!」

「弁解は無理か」「ですな」「ただ単に私たちが勝負を挑んだだけなのね」「ですわよね」

弁解の余地無し、そして、こいつ等うぜー

「問答無用・・・殺れ」

その掛け声と共に一斉に聖霊騎士団の奴らが襲いかかってきた・・・
「一時休戦って事でどうだ」「異議無し」「仕方ないですわね」「承知」

「って事で、アルバ」 「承知」

そう言った瞬間・・・アルバは人の姿に戻った

（分かってんな）ブン！<もちろん、あの姿の場合、氷義殿が10分とも持たないですから>ブン！

それもそうだ・・・魔剣ともなると、魔力の消費が半端じゃないからな〜って、ブン！心の会話の中でも現実には戦闘の真っ最中なので、攻撃をかわすながらの会話であった

「ちよっ、何やってんのよ」「その姿では戦えないんじゃないか？」

「魔剣を侮ってもらっては困りますな」

その瞬間！戦闘慣れしている聖霊騎士団が一枚上手なのか、アルバが二人の騎士に狙われ、避けるのが難しい所を狙われた・・・一人は長太刀を構え、右斜め上から斬りかかって来て、もう一人は火の玉を両サイドから飛ばしてきた・・・

刹那————ズゴォー！火の玉が命中し、その衝撃で砂煙がたった・・・誰が見ても直撃・・・と言うより、避けもしなかった・・・寧ろ、当たる事を望んだ？・・・なぜだろう砂煙がたっている、いくらなんでも長太刀で斬りかかった騎士の人はこの砂煙の中だし、さすがに出てくるだろう・・・なぜだ・・・姿が見えない・・・

だが、今は他人を構う余裕が無かった・・・ギイイイ・・・カン！今の現状は・・・デッカイ斧を持った騎士と鎌を構えた騎士と・・・

・剣の姿をした炎を振るう騎士と戦っていた・・・

あ、いや、少し違うな・・・接近戦だけではその三人だけであるが、その後ろに援護をしているとは思えない人物が数名・・・え？4人？つ、つまり7対1？うそ・・・他の奴らは手一杯だし・・・誰か・・・まったく・・・氷牙の力を使うか・・・しゃあない、本気を出すか・・・いや！女性相手にそれは失礼か・・・とかなんとか思いつつも、攻撃を受け流し続け、若干押され気味でなんとか持ち堪えていた・・・

(・・・ツ・・・このままだと無理があるな・・・)

「魔剣の力を侮るな！」

ズコーーーー！何所からともなく、火の玉が飛んできた・・・そして、鎖鎌を構えた騎士に当たった・・・

「アルバか？」

「もちろんですよ、氷義殿」

「冷や冷やさせやがって」

～END～

～アルバ～

「って事で、アルバ」 「承知」

俺は人の姿へと変えた

(分かってんな) ブン！<もちろん、あの姿の場合、氷義殿が10分とも持たないですから>ブン！

ここは、氷義殿の為にこの姿をしなければ、一度も試しさえしていない氷義殿にとっては辛いでしょうに・・・

「ちよっ、何やってんのよ」 「その姿では戦えないんじゃないんか？」

「魔剣を侮ってもらっては困りますな」

魔剣がただ単に使われるだけではないと言う事を示さなくてな・・・その瞬間の事だった・・・長太刀を持った騎士がいきなり正面から・・・両サイドから・・・火の玉？

好都合だ・・・俺はこの状況を待っていた！

刹那——俺は力を発動させた・・・俺は火の玉を取り込んだ・・・その時・・・

あ、砂煙？なんでこんなに俺の所だけ砂が多いの？まあ、いつか・・・

その時、長太刀が俺を斬り付けた・・・いや、正確には斬り付けようとした・・・

「長太刀を持った騎士殿、悪いがその剣は頂くでしょう」「何!？」

刹那——長太刀は俺の中に吸い込まれるかのように消えた

「少し、眠っていてください」

刹那——そう言った瞬間にアルバはその場から姿を消し、騎士の後ろへと回り込み首筋に一撃を叩き込んだ・・・

（END）

（氷義）

「魔剣の力を侮るな!」

ズコー——！何所からともなく、火の玉が飛んできた・・・そして、鎖鎌を構えた騎士に当たった・・・

「アルバか？」

「もちろんですよ、氷義殿」

「冷や冷やさせやがって」

「魔剣はそこまで弱くないって事ですよ」

「なるほどなく・・・騎士の皆様方、まだやりますか？」

氷義は騎士団の方を睨みながらそういった

「騎士を・・・誇り高き騎士を・・・舐めるな——!」

その瞬間の事だ、炎の剣を構えた騎士が氷義に向けて、炎を飛ばしてきた・・・と言うより、剣が鞭の様になり、蛇が襲い掛かってくる様だった・・・だが・・・

「氷義殿に仕える身として、我が力をお見せいたします」

アルバは氷義の前に立ち、火の鞭が飛んで来る方向に右手を出した・

・・・だが・・・火の鞭はアルバを襲った・・・しかし、火の鞭はアルバに触れた瞬間に赤い粒子となり、アルバに吸収された・・・
「我は魔剣テオダーナ、火を司る魔剣、我が力は炎と剣の類に干渉できる事だ」

そう言うときアルバの手に先ほどの騎士が持っていた長太刀が出現した
「つまりはお前が吸収した物はお前の力に加算されると」

「そういう事です」

「で、まだやるか？そっちの二人はもう気絶してるぞ」

リディアとクリムが相手していた騎士の二人は見事なまでに地面にへばり付いていた

「・・・・・・撤退するぞ」『はっ』

そう言い、騎士団は引き上げていった

「人騒がせですわね」「まったくよ」

「で、お前らは俺たちと戦うか？」

「まあ、魔剣がどんなのが知れた事だし、今日はおとなしく戻るとするわ」

「私も寮へ戻りますわ、第一に魔剣なんて物を敵に回したくないですし」

「そうか」

その後、それぞれ自分の帰るべき所に帰ったという・・・

～氷義END～

～とある場所～

「で、今回はアンタが原因か」

「事故だ、事故」

「にしても、この学園の生徒だけでも9人目か」

「だが、これだけ居ると戦力としては十分だな」

「これで帝国の奴らにも十分に対抗できるというものだな」

「ってかき、北ナドラがやばいんだっけ」

「確か・・・帝国に2回攻められたとか」

「もう時間の問題だな」

「あんちゃんの話では、その北ナドラは数年前にユナリア国つちゆ国を吸収したらしいないか」

「それはそうだがこの話の流れとなにか関係があるのか？」

「つまりは、そんなに強そうな国がすぐにやられるとは思えんと言
う事か」

「せやがな」

「ですが、国力の差が大きすぎて、何とか持ち堪えている様なもの
ですよ」

「結局は、北ナドラの次はここが危ないと言いたいだけだろ」

「・・・まずは今後の事が先決だ」

『喋った!』

「……俺も人間だ喋りはする」

「それはスマンかったな」

「で、とりあえずは今回この世界に来た……だれだっけ」

「天神氷義」

「そうだそうだ、そんじゃあまずは、そいつをこの【クウェイクナイツ】に入ってもらおうとしますか」

「それから、今後の事を考えるとしますか」

「では、諸君、今日はこれで終了とする」

((((((天神……何所かで聞いたような気がする))))))

第六話 大切な初戦がとんでもない事に!?!そして、裏で動く謎の組織(後書き

如何だったでしょうか

誤字などがある場合は報告してくださいと嬉しいです!

感想などお待ちしておりますので、気軽にコメントしてください

外伝 天神の姓を持ち、黒き炎を操る男の戦い（前書き）

投稿が遅れたことは深くお詫び申し上げます。

少ない量ですが読んでいただけるとうれしく思います。

それでは、どうぞ！

外伝 天神の姓を持ち、黒き炎を操る男の戦い

ここは北ナドラ連盟中立国の南に位置する。

ギナマドラ帝国の国境を越え、旧ユナリア国付近の難所を超えたところある荒地の出来事・・・

「逃げてばかりでは話にならんぞ！」

「「ぐわああああ」」

戦場・・・それは命を何時何所で落とすかもしれない場・・・

そこで、一人の大きな刀を持ち、赤混じりの黒をした猛将が居た・

・

「面白くねーな、もっと骨のある奴はいねーのかよ」

その猛将はおそらく40歳前後の・・・中年の・・・オッサンである

「敵はたった一人だ、数で掛かれば問題無い、なんとしてもここを抜け、作戦目的地へ到達するのだ！」

『おおー！！』

指揮官と思わしき人物が号令をかけた瞬間、兵の士気が上がった

「束になってきても結局は一人の強さは変わりはないんだよ！」

猛将は大きな刀を振り、今度は無数の黒い炎の斬撃を放った・・・

「がはっ」「ぐああああ・・・」「ギャー・・・」

「これで、4分の1ぐらいは削ったかな？」

「くっ・・・このままでは、作戦を実行する前に・・・軍が、軍が解滅してしまう。」

目的地はすぐそこだと言うのに」

その指揮官はその猛将を前にただただ立ち尽くす事しかできなかった。

「もうお仕舞いかよ、それでも帝国軍か？」

猛将は大きな刀を振り上げ、帝国軍が撤退していく方に振り下ろし

た・・・

「大将の1人や2人ぐらい出てこいよ!」

振り下ろすと共に、黒い炎の斬撃が起こり、帝国軍を襲った・・・

帝国軍を襲う斬撃は一閃の雷によって打ち消された・・・

「まったくよ、昼寝から目を覚ませば、なんだこの有様だ・・・お前は下がってろ、こんなんじゃない火竜の奴に笑われる」

「やっと、出てきたか」

その猛将の前にはやや長めの黒い髪をした黒と白の鎧に電気を帯びた剣を持つ騎士が現れた

「まったく、こんな奴に指揮なんぞ任せたのが間違いだったよ、まったく、人が昼寝してんのによくも邪魔しやがったな」

「申し訳御座いません。」

ゼナード様」

指揮を執っていた者がその騎士にそう言った。

「でだ、その大剣持った中年のオッサン、なに、相手して欲しいのか?」

「まあ、相手してくれんなら誰でもいいわ、俺の名は天神炎希だ。こんなオッサンでも礼儀つてのがあるのでな、名前を覚えておいてやるよ」

「フッ・・・俺はデガル・ゼナートだ、俺が直々に手を下すからには派手に楽しませてくてよ。」

「それは保障するぜ、これでも色々やりやってきたんでな」

炎希はそう言い、刀を構えた。

「ほお、それはやりがいがありそうだな。」

ゼナートもそう言い、剣を構えた。

「今すぐ、その期待に答えてやるよ!」

炎希は刀を大きく一振りした・・・その瞬間、その刀に黒い炎は灯った

「へえ、面白い剣を持ってるな、それじゃ、俺もだ。」

——— 汝、我との契約に置いて、今その姿を現せ———
——— 汝、その姿をこの剣に宿し、戦場を駆ける雷狼となれ———
———」

その瞬間、ゼナートが持っていた剣が電気を帯び始めた・・・
「さつき、俺の斬撃を打ち消した時のは、本気じゃなかったってことか」

「オッサンの方も本気を出したらどうだ」

「それは、お前次第だな・・・これは挨拶代わりだ！」

オッサン・・・炎希は黒い炎を帯びた刀を軽々と片手で目にも留まらぬ速さで振り、その刀からは一つの黒い斬撃が放たれた・・・次の一瞬の間の事だった。

その黒い斬撃は突如、その姿を変え、まるで真夜中に獅子が襲い掛かって来るかの様だった。

「派手な歓迎を光栄に思ってるよ。」

ゼナートも負けじと襲い掛かって来る黒い炎に対して、電気を帯びた剣をレイピアを使い時のような構えをした・・・そして、その剣から放たれる電気が一層に増した。

「走れ、雷狼！」

次の瞬間！剣を突き出し、剣から大量の電気が一斉に放たれた。

その電気の姿は正しく、狼・・・そう、嵐の中を縦横無尽に駆け巡る雷狼であった。

黒き炎の獅子と雷光の狼がぶつかり合い、互いに互いを消し去った・・・

「ふ、ふふ、フハ、ハハハハハハハ」

その後、いきなり、炎希が笑い出した。

「オッサン、あんたよくもこんな状況で笑ってられるな」

ゼナートがそうツツコム

「すまん、すまん・・・久しぶりだ・・・やっぱ、戦いはこ

うじゃないとな・・・この、黒炎の獅子が勝つか、それともお前の稲妻の狼が勝つか・・・勝負と行こうか」

「面白い、面白いよオッサン、あんた、俺と来ないか、そうすればこれ以上に面白いにめぐり合えるかもしれないぜ」

「それもいいが、今はお前と戦いたい」

炎希は再度刀を構えた

「いいぜ、それじゃあ、俺が勝ったら、俺と来い！」

ゼナートも剣を構えなおした

「俺を倒せたらの話だな」

「そうするわ・・・これ以上の話合いは無意味だしな・・・！」
ゼナートは一瞬にして自分で制御していた気を開放するかのよう
に気を周囲に解き放った・・・それは、ゼナート率いる帝国軍のまだ
軍に入って日の浅い一人の小さな新兵の少女にも分かるほどの魔力
の放出で、体が痺れそうな感覚だった・・・

「良い気迫だ」

炎希もそれはで、燃えるかの様な気が、彼の本気と思わせるかのよ
うな、どす黒く、禍々しい中にも暖かい黒い希望とも言える気が放
たれ、その新兵は、圧倒され、気を保つのがやっとのぐらだった。

↓帝国軍新兵の少女↓

ゼナートと炎希から、力が放たれ、帝国軍の兵達がその力の圧力に
より、立っているのも辛くなるほどで、兵士の中にも、その力に耐
え切れずに、気絶する者も居た。

（すごい、この作戦が初陣だったけど、帝国軍三大魔将のゼナート
様の本当のお力が見れるなんて・・・けど、ゼナート様が全力を出
してまで戦う相手の人に精霊のような気配なんて・・・）

「おい、その新入り、確かお前は一応精霊使いだったな」

「はい、契約相手はいませんが確かにそうですけど」

若い一人の兵士がそう話しかけ、その少女はそう答えた。

「なら、ゼナート様と戦っている奴は一体どんな精霊と契約しているんだ？」

「それが、精霊の様な気配も、魔力が剣に吸われてもいません」
その発言に若い兵は驚いた。

「そんなバカな話があつて堪るか、だとすると、あの炎は何だ！あんな物が出せるのは相当は魔力と最低でもAランクはないと出せない力だぞ、それにあの禍々しい邪気はなんだ！」

若き兵はそう、少女になぜか怒鳴った

「そんな事、私が知るっている訳がないじゃないですか。」

「済まない、取り乱した」

随分と気の変わりが早いようで、もう直った・・・

「ただ、言える事が、あの剣からその禍々しい気が放たれていて、剣の魔力とあの人の魔力が一致する事が感じ取れますし、魔力自体はあの人の物なので、おそらくは剣に蓄えられていた魔力を使っているのではないでしょうか。」

少女は冷静に、炎希から感じ取れることを素直に若い兵に伝えた

「禍々しい気なら分かるが、そんな魔力の流れまで分かるのか。」

「はい、私は元々魔力に敏感なので少しは分かります。」

若い兵とその少女らが炎希から感じられる気などの会話をしていると・・・

「おい、その二人、ボサットしてないで怪我人の手当てを手伝ってくれ」

少し離れた所から、さつき、指揮を執っていた人物から、怪我人の手当てをするように言われた。

辺りを見ると、死者こそは少ないが、怪我をしている者が多く、倒れこんでいる者や動けはするものの、腕を怪我していたりしている者などなど、無傷でいた者は少なかつた。

「今すぐ行きます」「すすすす、す、すみません」

若い兵は普通に返事をできたが、少女は、慌てるほどでもないのに、誰もが驚くレベルで慌てた

～END～

～炎希～

戦いが始まり、5分・・・10分・・・15分・・・もしかしたら、それ以上かもしれないほどの時間が経っただろう、戦い開始後は攻撃をしているものの、攻撃する度に電撃で打ち消されている・・・逆も同じだ・・・

「ここままだゃあ、無駄に魔力を消耗するだけだな」

炎希がそう言うのと「それはお互い様だ」と食らいつく様にゼナートが答えてきた

「なら、一発キツイのをお見舞いしてやるよ」

「それなら、俺も大技を使うとするよ」

両者はそう言い、構えに入った・・・

「天神一刀流、黒炎の邪の陣・・・」炎希は刀を上には振り上げると共に、炎希の足元から黒い魔法陣が作られ、禍々しい気が増加した。「我、汝の力を求める物なり、汝、その雷電の力を我との契約の下にここに示せ！」ゼナートは剣を地面に突き刺した・・・その瞬間、その剣から、炎希を遥かに超える魔法陣が一瞬で組み上げられ、そこから電気がバチバチと音を立てて、大量の電気が群れを成す狼のようにゼナートの周りに集まってきた。

「一閃」「雷光」両者が同時に攻撃を放った・・・

だが、その攻撃の差は大きすぎた・・・ゼナートは電気をまるで騎馬隊が突撃を駆けるが如く飛ばすのに比べて、炎希は剣を振り下ろし、3つの地面を這う大きな斬撃を飛ばしただけ、到底、ゼナートが放つ電撃には勝てるとは思えなかった・・・

「その程度か・・・」ゼナートが炎希の技を見て、そうはき捨てた・・・つまりは、勝利を確信したと言う事であった

「天昇！」炎希は一気に刀を振り上げた・・・その時だった、振り上げると共に、その地を這っていた斬撃とその這った後から、まる

で炎の壁と言える様な黒い炎が吹き上げてきた・・・それをする事によって、ゼナートが飛ばした電撃も消え去り、その衝撃で、爆風が起こり、砂煙が立った・・・

・
・
・

「なかなか良い、精霊を連れてるんだな、さすがは帝国軍三大魔将と言った所だな」

あれから、少しの時間が流れ、砂煙がハッキリとではないが少しだけ晴れ、視界が少し戻ってきた

そして、その中から炎希は立ち上がり、そう言った

「まだやる気か？オッサン」

炎希から、少し離れた所から、力強くとまではいかないが、まだ余裕がありそうな言い草でゼナートが言ってきた

「まだまだ戦いたい所だが、こちらも長旅でな、これ以上戦えるほどの魔力は残ってない」

砂煙がハッキリと晴れた

その場には炎希と、地面に突き刺さった刀の姿があった

「それじゃあ、約束どうり、俺と来い」

ゼナートは炎希に近寄りながらそう言った

「お前が行く先に戦いはあるか」

「ああ！」

「面白い、戦いはできるか」

「ああ！」

ゼナートは炎希の問いに自信を持って答えていく

「俺は俺の道に行く、それがどんな結末を招いたとしてもだ、今、ここに居る奴らはそんな奴らの集まり、軍のはみ出し者が多い、だからお前の様な奴がいても面白いと思う」

「分かった、そんなはみ出し者の集団に入れてもらおうとするよ」

「よろしく頼むよ、オッサン」

ゼナートが手を前に出し、握手を求めた

「炎希だ、天神炎希」

炎希はそう言いながらも、握手を交わした・・・

外伝 天神の姓を持ち、黒き炎を操る男の戦い（後書き）

いかがでしたでしょうか。

誤字などがありましたら、報告していただけるとうれしく思います。今回は外伝っぽくいかしてもらいましたが、これも本編に大きく関わりますので、掲載させていただきます。

次回も外伝になるかもしれませんが、そこでは第二の主人公を書かせていただく形になると思いますので、応援をよろしく願います。

外伝 異世界の傭兵（前書き）

お久しぶりです！

中三になってから、勉強に追われていましたが、ついに時間が空きました！

というわけで更新させていただきます！

外伝 異世界の傭兵

この世界には魔装具パーツと言うものが存在する

魔力を魔装具に流し込む事により、ネックレスや指輪、ブレスレット、他にはチェーンなどなどのアクセサリーを剣や槍などの武器本来の姿に戻す事ができる便利な物である

その武器にも、魔力を流し込む事で、本来の力を使う事ができる例を挙げると・・・銃などで、銃は極端だが、実弾はなく、魔力を弾丸に変えた魔弾を打ち出すと言う原理である。

〓とある町の小さなギルド〓

ギルド、それは傭兵達が集う場、そこでは貼り出されている傭兵募集のビラや大型モンスターの討伐依頼などは張られた掲示板や食事を行う酒場などがある場・・・

そこに蒼いバンダナをしたとある傭兵がカウンターに座っていた居た・・・

「おい、見ろよあれって魔弾じゃねえか」「ああ、あのバンダナだとすれば奴だな」「魔弾は相変わらず一人で居やがる」「奴も傭兵なら、仲間の一人ぐらい居ないもんかね」「噂じゃあ、唯一の家族とあの魔剣士を殺ったやしいぜ」「俺は逃げられたって聞いたけどな」「俺は狩ろうとした奴に・・・」

周りからは彼の善くない噂ばかり、彼は現最強の傭兵、異名は魔弾、本名はあまり知られていない・・・

数年前までは彼の名を知る人も多く居たのだが、ある出来事によりその者たちは死んでいった。

ギルドの登録記録によると、彼の名前はエルド・デイスティ、使用する魔装具は銃、二丁装備しているが、その内の一丁が特殊な加工を施した拳銃にしては大きすぎる物で、普通の拳銃の二倍、もしか

するとそれ以上かもしれない、片方は自動式拳銃を使用、もう片方は大型の回転式拳銃となっている。

五月蠅い、とてつもなく周りからの雑音が多すぎる・・・魔弾がどうのこうのはどうでもいい

「落ち着いて酒の飲めやしない」

独り言の様に呟く、実際は独り言だ・・・仲間やら昔は居た・・・十分すぎるほどにだ・・・ある事をきっかけに多くのやつらが去っていった・・・あの二人は別としてだがな

俺は一人、現在での話はなしになるがな

最強とはよく言ったものだ・・・人一人守れないようじゃ話にならない、強いどうのこうのじゃなくて守りたいものを守るかどうかだもう一度、一瞬でもいい、あいつ等に会いたい、そして謝りたい・・・

エルドは酒の入ったグラスを傾け、一人孤独にカウンターに座る・・・その周りには誰も居ない、他の傭兵は彼を避け、関わろうとしない・・・

・
・
・

「た、大変だー！街に奴らが、モンスターが、進入してきたー」
一人の男性がギルド内へと慌てて駆け込み、そう叫んだ・・・

（は？なんでモンスターが街に？・・・まあ、俺にはどうでもいいさ、さっさとこの街を出るか）

騒がしくなるギルド内、それに乗じてエルドはマントに身を包み、気づかれること無くギルドを出た・・・

「こ、こうなったら魔弾にでも頼んで・・・って、奴は何所に行った」「さっき誰かが出ていたが、まさかそいつが魔弾か！」「あの野郎、真っ先に逃げ出しやがった」

まるで人事のようにギルド内に居る傭兵は他人に押し付けようとする

るものの、その頼みの綱が居なくなっただけにより、よりいつそ混乱し始めた・・・この光景を住民が見たらどう思うことか、いくら傭兵が自由な奴らばかりとはいえ厭きれるばかりの光景だった

・
・
・

エルドはギルドを出て、街に見てみるとそこはすでに火の海だった・・・そこには多くのモンスターと燃えて崩れ去ってゆく街の光景でいっぱいだった・・・

「こりゃ、街というより死地だな・・・傭兵としては気が乗らないが、ちよつと遊んでいこうかな」

そう言うのと彼の左手の中指にされていた指輪が光り、そして左手には自動式拳銃のブレン・テンが握られて、指輪が消えていた

「ゴオオオオ・・・」

「いきなり、ボスのお出ましか」

やや離れた所から翼の生えた巨大な人型のモンスターが飛んできた・・・その姿はまさしくガーゴイル・・・ガーゴイルでも、上級に位置する種類の奴が飛んできた

「こっだけ広い街なのにいきなりコイツに見つかるとは、とことんついてないようだな」

ガーゴイルは空中で何かの動作を始めた・・・

「一撃だ・・・一撃で仕留める・・・」

エルドはガーゴイルに銃を向け、魔力を籠め始める・・・だが、その間にもガーゴイルは何かをしている・・・まるで、魔方陣を組むように

（奴は一体何をしている・・・モンスターは魔法なんて使えるはずが・・・いや待てよ、年に数回そんなことをするモンスターが出るって噂で・・・そうか、あいつ等もそれで！）

一瞬だが、エルドの気が反れた・・・その瞬間だった、ガーゴイルは魔方陣を完成させ、その強大な魔力で、鉄球のような魔力の塊を

創り、その攻撃を放った・・・

「ッ・・・はあああああ！・・・一発イテッやつをお見舞いしてやるよ！」

ズバーーン、エルドの銃からは考えもつかないほどの魔弾が放たれた・・・そう、二つ名の由来はここから来ているのだ・・・

そのときの事だった、ガーゴイルの放ったその強大な魔力とエルドの放った魔弾がぶつかり合った瞬間事だった・・・次元の扉が開いた・・・あの時の様に、次元の扉が・・・その瞬間、ガーゴイルは去っていった、と言うより、もうすでに居なかった・・・

（やばい、吸い込まれる）

だが、すでに遅し、エルドは次元の扉へと消えていった・・・

外伝 異世界の傭兵（後書き）

どうでしたか？この作品の他に外伝小説を作りますので、期待はしなくてもいいので、ぜひ読んでください

※新作の「パラレルワールドの俺は傭兵」も読んで下さいね！登場キャラクターはこの作品とほぼ同じなので、なんとなく分かる可能性があります（年齢差とかは一部調整してありますのでご注意ください！後はまだ、この作品には出てきていない人物とかも出てくるので、先取りにはもってこいかも！）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5083p/>

封印の氷刀と契約の魔剣

2011年9月13日08時56分発行